

コロナショック下での働き方 リアルタイム調査からの学び



えなつ いくたろう

江夏 幾多郎

(神戸大学 准教授)

(主な著書)

『人事管理
-- 人と企業、ともに生きるために』
(平野光俊 著 江夏幾多郎 著
有斐閣 2018年)



かんき なおと

神吉 直人

(追手門学院大学 准教授)

(主な著書)

『小さな会社でぼくは育つ』
(神吉直人 著 インプレス
2017年)



ふもと よしみ

麓 仁美

(松山大学 教授)

(主な論文)

「組織における協力行動のマネジメント：
仕事の設計がメンタリング行動と向社会的
モチベーションに与える影響」
(『組織科学』第53巻 第2号 2019年)

(経緯)

我々は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行初期の2020年3月末、最初の緊急事態宣言が発令される直前に、日本の就労者の働き方や意識についての一般的傾向を測定するため、民間研究機関と共同で大規模な調査プロジェクトを立ち上げた。

3000人を超える就労者を対象に4月と7月に質問票調査を行い、調査結果に基づくレポートを度々報告し、2021年11月には最新の研究レビューとより精緻な計量的分析の結果を盛り込んだ学術書籍（『コロナショックと就労』ミネルヴァ書房）を出版した。

「今」を知り、速やかにその結果を報告するという、通常の研究とは異なる実践に我々は没頭し、そこから多くを学んだ。

(今回の定例会開催のポイント)

本企画では、まず、どのような社会的意義を予感しながら我々がこの調査プロジェクトを立ち上げ、動かしたかについて述べたい。

研究は社会から隔絶したものでなく、社会的実践の一つであることを信じてやまない我々であるが、その成否についてご参加いただいた方々と検討したい。

その上で、我々3人がそれぞれの関心に基づいて調査データを分析した結果を紹介したい。

データを集め、分析した頃から2年を経て、COVID-19への人々の向き合い方、それに関する研究上の知見にも一定程度の刷新が見られる。そうしたことも横目に見ながら、「あの頃」についての知見が現在持つ意味についても検討したい。

2022年11月24日（木）19:00～20:30

会場：コンファレンススクエアエムプラス
(10F グランド)

交通：JR東京駅 丸の内南口から徒歩2分
<https://www.marunouchi-h-c.jp/building/2/conference>

参加費：組織学会会員1,000円・一般2,000円
会場定員：80名(要事前予約)・オンライン参加
参加申込専用サイト：
<https://forms.gle/cDxZrSE7AEHimMu46>

協力：三菱地所株式会社